

実践報告

体験学習「遊友広場」の教育効果についての考察 ～留学生の入学と実施時期の影響～

立川かおり・鍋島恵美子・吉村 浩美・馬場由美子・小川 智子

(西九州大学短期大学部 地域生活支援学科)

(平成 31 年 1 月 22 日受理)

A Study on The Educational Effect of "Yuyu Hiroba" Experiential Learning — Influence of Admission and Implementation Time of Foreign Students —

Kaori TACHIKAWA, Emiko NABESHIMA, Hiromi YOSHIMURA, Yumiko BABA, Tomoko OGAWA

(*Department of Living and Welfare, Nishikyushu University Junior College*)

(Accepted January 22, 2019)

Abstract

I will examine the educational effect that the "Yuyu Hiroba", which is experience learning, brings. International students enrolled from this year. In addition, due to the influence of national exams the implementation date changed from November to June. In order to think about future direction from these things, we examined contents of the worksheet and examined it.

Key words : experience learning : 体験学習
International students : 留学生
Implementation date : 実施日

I はじめに

要介護者の日常生活を支える介護福祉士には、利用者一人ひとりの個別ニーズを理解し、利用者のQOLの維持向上を目指した実践力が求められる。専門職として介護や福祉を学ぶ学生にとって、コミュニケーションは重要な位置をしめるキーワードである。

コミュニケーションは、日常生活の中では、特別に意識することなく行われている行動であるが、対人援助におけるコミュニケーションは、日常のコミュニケーションとは異なり、常に傾聴の態度を示し、共感、受容が行われることが求められる。要介護者と気持ちを通わせ信頼関係を形成し、内面の深奥まで知り得ることが根源的なニーズを確かめることになる。しかし、学生は、まだ介護現場の体験や人生経験が浅く、要介護者とのコミュニケーションは、普段友人ととるようなコミュニケーションより難しいことは明らかであり、専門職として、真に相手を理解することは、容易ではない。

授業で学んだ利用者理解や介護の方法等、授業内容をさらに深め自らを高めるためには、学生が自分の身体を通して実際に障がい者の方と触れ合い、働きかけ、また職員の対応の仕方を目の当たりにして感動したり、衝撃を受けたりと、心を揺り動かされる中で考えを深めることが必要であると考ええる。

「遊友広場」開催の目的は、障がい者と学生の交流を図る、交流を通して障がいの理解を深める、地域に貢献することである。これらの目的は、学科イベント開始以来同様である。また「地域生活支援学科のディプロマポリシー」及び、「求められる介護福祉士像」にも“協働によるチームケア”“地域を通じた汎用性能力”“実践的能力”などが挙げられている。さらに、教育機関で注目されている学習方法「アクティブ・ラーニング」では、能動的に学び、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験などの汎用的能力の向上や育成を目指すこととなっている。

このようなことから体験学習は必要不可欠な学びだと考える。

「遊友広場」は、教科書から得た知識とは違う、座学では決して得ることのできない生きた経験ができる貴重なイベントであり、イベントの企画力、協調性、きちんと意見を述べる事が出来る主張力、周りを導く力、人を動かす力、協力する態勢、危険等の予測力、臨機応変な対応力、知的障がい・身体障がいを持つ方への対応を学ぶことを目的に開催している。開催に際しては、実行委員会を中心とした学生による準備・企画・運営を行い、学生全員が一人ひとり役割を持ち継続してきた。しかし、近年学生の人数は少なくなり、一人何役もこなさなければならぬ状況になっている。また、今年度の1年生は

半数以上(14/29名中)が留学生であり、さらに、国家試験受験の影響もあり、例年11月であった実施時期を6月に移動させた。このような変容の中で、学生の学びの変化をワークシートにより比較をし、考察することで、教育効果を振り返り、今後の遊友広場の指導の在り方について考えることとした。

II. 学科イベントの変遷

学生の実践力を高め、自信をもって介護に向き合えるようになるよう、地域生活支援学科福祉生活支援コース(旧生活福祉学科)では、体験学習の一環として平成13年度から平成23年まで11回「おおきくなーれ友だちの輪」、平成24年から平成30年まで「遊友広場」を開催し、今年で7回目となった。このイベントは、介護や福祉に関心のある県内の高校生や小規模作業所の障がい者を招き、学科の学生と合わせて総勢300名~250名が一堂に体育館に集まり、学生の企画・運営によるレクリエーションやダンス等で楽しく過ごしていただくというものである。開始時は、午前・午後のプログラムであったが、現在は、縮小し午後のみプログラムとなっている。

「大きくなーれ友だちの輪」の意義や教育効果の報告については、西九州大学・佐賀短期大学紀要第36号(平成17年度)学科イベント「大きくなーれ友だちの輪」の変遷とその意義について(高尾兼利)、西九州大学短期大学部紀要第43巻(平成24年度)体験学習を通じた教育方法に関する一考察~イベント「大きくなーれ友だちの輪」の教育効果(鍋島ほか)において報告され、企画から開催するまでの過程におけるチームワークの大切さ、企画の難しさ、リーダーシップのあり方、充実感の体験、職業意識形成につながる思い、障がい者に対する理解の深化、成功した時の喜び等、学生が多くのことを感じたり学んだりしている。

III. 「ワークシート」からみた体験学習の効果

イベント実施後、学生は、振り返りとして「ワークシート」の記入を行っている。

1) ワークシート記入日

平成29年11月および平成30年6月

2) ワークシート回答数

2017(H29)1年生(19/21名中)

2017(H29)2年生(17/17名中)計36名

2018(H30)1年生(28/29名中)

2018(H30)2年生(19/19名中)計47名

表1 遊友広場ワークシートの結果

	2017年		2018年		総数	2017年	2018年	2017年	2018年	2018年1年	2017年	2018年	2017年	2018年	2年間	2年間		
	1年	2年	1年	2年		1.2年	1.2年	1年	2年	留学生	日本人	1年	1年	2年	2年	1年生	2年生	
学生数	20	17	29	19	85	37	48	20	19	15	14	20	29	17	19	29	36	
回収数	19	17	28	19	83	36	47	19	19	14	14	19	28	17	19	28	36	
大変ある	7	9	19	13	48	16	*32	7	13	11	8	7	19	9	13	26	22	
少しある	12	8	7	6	33	20	13	12	6	1	6	12	19	8	6	19	14	
ほとんどない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
全くない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
無回答	0	0	1	1	2	0	2	0	1	0	0	0	1	0	1	1	1	
指導力の必要性	7	9	19	10	45	16	29	7	10	12	7	7	*19	9	10	26	19	
人を動かすことの難しさ	7	12	16	12	47	19	28	7	12	5	11	7	16	12	12	23	24	
意見をまとめる難しさ	10	9	14	11	44	19	25	7	11	8	6	10	14	9	11	24	20	
責任ある行動の大切さ	6	11	18	13	48	17	31	6	13	11	7	6	18	11	13	24	24	
一緒に楽しむ事の大切さ	12	10	23	14	59	③22	③37	12	14	11	12	12	23	10	14	②35	24	
自主性の大切さ	5	12	12	8	37	17	20	5	8	6	6	5	12	12	8	17	20	
他部署との連携	10	12	21	17	②60	③22	②38	10	*17	11	10	10	21	12	17	③31	①29	
健康管理の必要性・大切さ	7	4	10	9	30	11	19	7	9	6	4	7	10	4	9	17	13	
リハーサル・シミュレーションの大切さ	14	16	17	13	②60	①30	30	14	13	8	9	14	17	16	13	③31	①29	
気配りの大切さ	10	11	16	13	50	21	29	10	13	9	7	10	16	11	13	26	24	
予測して動くことの大切さ	11	11	20	13	55	③22	33	11	13	11	9	11	20	11	13	③31	24	
報告・連絡・相談の大切さ	12	13	24	16	①65	②25	①40	12	16	13	11	12	24	13	16	①36	①29	
人を動かす力	大変いい経験ができた	5	9	9	9	32	14	18	5	9	6	3	5	9	9	9	14	18
	少し経験できた	7	4	10	9	30	11	19	7	9	3	7	7	10	4	9	17	13
	あまり経験できなかった	4	0	4	0	8	4	4	4	0	1	3	4	4	0	0	8	0
	全く経験できなかった	3	0	0	0	3	3	0	3	0	0	0	3	0	0	0	3	0
イエンバ画面力	大変いい経験ができた	7	8	11	5	31	15	16	7	5	9	2	7	11	8	5	18	13
	少し経験できた	5	6	9	8	28	11	17	5	8	3	6	5	9	6	8	14	14
	あまり経験できなかった	5	3	8	5	21	8	13	5	5	2	6	5	8	3	5	13	8
	全く経験できなかった	2	0	0	1	3	2	1	2	1	0	0	2	0	0	1	2	1
協調性	大変いい経験ができた	9	8	14	15	②46	17	29	9	*15	10	4	9	14	8	15	13	23
	少し経験できた	8	9	11	3	31	17	14	8	3	2	9	8	11	9	3	19	12
	あまり経験できなかった	2	0	3	1	6	2	4	2	1	2	1	2	3	0	1	5	1
	全く経験できなかった	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
主張	大変いい経験ができた	3	*10	2	7	22	13	9	3	7	2	0	3	2	10	7	5	17
	少し経験できた	8	4	17	11	40	12	*28	8	11	8	9	8	17	4	*11	25	15
	あまり経験できなかった	8	3	7	1	19	11	8	8	1	3	4	8	7	3	1	15	4
	全く経験できなかった	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0
指導力	大変いい経験ができた	2	8	11	7	28	10	18	2	7	7	4	2	11	8	7	13	15
	少し経験できた	4	3	12	11	30	7	**23	4	11	6	6	4	12	3	*11	16	14
	あまり経験できなかった	10	6	4	1	21	16	5	10	1	1	3	10	4	6	1	14	7
	全く経験できなかった	3	0	1	0	4	3	1	3	0	0	1	3	1	0	0	4	0
協力	大変いい経験ができた	10	11	22	15	①58	21	37	10	15	11	11	10	22	11	15	32	26
	少し経験できた	9	6	6	3	24	15	9	9	3	3	3	9	6	6	3	15	9
	あまり経験できなかった	0	0	6	0	6	0	6	0	0	3	3	0	6	0	0	6	0
	全く経験できなかった	0	0	0	1	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1
予測力	大変いい経験ができた	2	7	6	7	22	9	13	2	7	2	4	2	6	7	7	8	14
	少し経験できた	10	7	15	11	43	17	26	10	11	8	7	10	15	7	11	25	18
	あまり経験できなかった	5	3	6	1	15	8	7	5	1	3	3	5	6	3	1	11	4
	全く経験できなかった	2	0	0	0	2	2	0	2	0	0	0	2	0	0	0	2	0
知的身体障がいへの対応	大変いい経験ができた	8	6	9	11	34	14	20	8	11	5	4	8	9	6	11	17	17
	少し経験できた	8	8	13	6	35	16	19	8	6	5	8	8	13	8	6	21	14
	あまり経験できなかった	2	1	6	1	10	3	7	2	1	4	2	2	6	1	1	8	2
	全く経験できなかった	1	2	0	1	4	3	1	1	1	0	0	1	0	2	1	1	3
対応力	大変いい経験ができた	5	9	11	12	37	14	23	5	*12	7	4	5	11	9	12	16	21
	少し経験できた	10	7	16	6	39	17	22	10	6	6	10	10	16	7	6	26	13
	あまり経験できなかった	3	1	1	1	6	4	2	3	1	1	0	3	1	1	1	4	2
	全く経験できなかった	1	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0

(*P<0.05, **P<0.01)

○は順位

3) ワークシートの内容

- (1) 質問①今回のイベントの準備や実施で学んだこと、気づき、成長はあるか

(大変ある・少しある・ほとんどない・全くない)

- (2) 質問②どんなことに気づいたり学んだりしたか(複数回)

(指導力の必要性、人を動かすことの大切さ、意見をまとめることの難しさ、責任ある行動の大切さ、一緒に楽しむことの大切さ、自主性の大切さ、他部署との連携、健康管理の必要性・大切さ、リハーサル・シュミレーションの大切さ、気配りの大切さ、予測して動くことの大切さ、報告・連絡・相談の大切さ、その他)

- (3) 質問③自分の学びで当てはまるもの

(人を動かす力の経験、イベントの企画の経験、主張についての経験、指導力に対する経験、協力に対する経験、予測力に対する経験、知的・身体障がいの方への対応の経験、対応力の経験)

- (4) 質問④その他の気づき(自由記述)

4) ワークシートの結果と考察

- (1) 質問①準備や実施で学んだこと、気づき、成長はあるかについて

2017年度・2018年度ともに、1年生・2年生すべての学生の回答が「大変ある」または「少しある」であり、イベントに参加した学生全員が何らかの学び・気づき・成長を実感していることがわかる。

年度別にみると2017年度の学生より2018年度の学生が有意に“学び、気づき、成長”が「大変ある」と回答した($p<0.05$)。2017年度の学生は、日本人のみであるのに対し、2018年度の学生は、1年生の半数が留学生となっている。留学生に対しては、イベントの意義の説明や何らかの役割を持つことなどを、言葉での説明だけでなく実物を見せたり一緒に動くことで理解してもらえよう、事前学習を工夫した。こうしたことが学生の内面的変化につながり、結果的に1年生・2年生・留学生が、それぞれに学び・気づき・成長を多く感じ取った可能性は高いと考えられる。

- (2) 質問②どんなことに気づいたり学んだりしたかに関して

気づきや学びが多かったものの2年間を、学年を問わずみても『報告・連絡・相談の大切さ』65名(43%)、『リハーサル・シュミレーションの大切さ』60名(42%)、『他部署との連絡』60名(39%)、『一緒に楽しむことの大切さ』59名(39%)を学べたとする回答が上位を占めた。

当日に向けた役割においても、自分が担当する係り以外の情報も知り得ていなければ、少ない人数で協力し合いながら準備を進めることは困難である。そのた

め、報告・連絡・相談や他部署との連携が必須であるということに気づいたと考えられる。これらは、福祉職としての職業意識の形成にもつながる成長と考える。

また1年生に関しては、これまで多くの参加者と共にイベントを開催した経験がなく、多人数でのレクリエーション経験もないと思われる。毎年のイベントを楽しみにして足を運んでくださる参加者の方々に喜んでいただくためには、学生自らが参加者と共に楽しむことが大切であり、障がい者との交流を楽しむことでイベントの充実感を体験しているといえる。さらに失礼のないよう、時間にロスがないようプログラムの進行をスムーズに行う必要があるため、リハーサルやシュミレーションが重要であると感じているのではないかと考える。

学年別に見ても、1年生と2年生の学びの上位はほとんど変わらないが、1年生は『予測して動くことの大切さ』が上位に加わっている。イベント当日になると計画通りに進まないことや参加者の状況など、イベントの参加経験のない1年生にとっては、つまずきを感じる状況があったと予測できる。また、先輩や職員動きから学び、得ることも多かった可能性もある。

経年的に見ると『他部署との連携』については2017年度の1年時に10名(52%)に対し、2年時は17名(89%)と有意に多く学んでいる($p<0.05$)。1年時には、指導してもらった立場であったが、2年時には今まで感じる事がなかった“先輩として”、またイベントを先導する“リーダーとして”の意識が確立され、1年時より連携の必要性を学んでいると考えられる。1年次にイベントへ参加した経験から、準備の早い段階で他部署との連携が不可欠であることが、学生個人の意識の中にあっただのではないかとと思われる。

2017年度と2018年度の1年生同士を比較すると、2017年度の1年生が7名(36%)であるのに対し、2018年度の1年生は19名(67%)が『指導力の必要性』を有意に学んでいる。その内、日本人学生は7人(50%)、留学生は12人(85%)が指導力の必要性を感じている。留学生がこの有意差に影響している可能性も考えられるが、2017年度の1年生の学生も4割弱いるため、留学生に限らず、実際のイベントを体験したからこそ学べるものではないだろうか。このことは、当日に参加された障がいを持った方々へ、レクリエーション・ゲームの説明など障がい者に理解してもらうためにはどうしたらいいか、指導することの難しさを感じ取ったのではないかと考える。また、自分たちの指導力のなさを感じただけでなく、2年生に対する指導力不足を感じて回答した可能性もある。2年生としては、1年生の半数が留学生であることで、指導

を行いつらかったことや、開催時期が、以前（11月）より早くなり、入学して間もない6月であったことが影響したとも考えられる。来年度は、2年生に留学生がいることで、指導のしづらは軽減され、多少は変化があるものと予測される。

・その他学んだことの記述内容について

その他学んだことについては、「役割を持つてすることの大切さ」「机上演習不足」「臨機応変」「自分が思っている常識が通らないこと」「笑顔」などが記入されており、それらのコメントからも、他部署との連携・人を動かすことの難しさ・予測して動くことの大切さ・一緒に楽しむことの大切さなどを学んでいることがわかった。

(3) 質問③「自分の学び」について

『人を動かす力』、『イベントの企画力』、『協調性』、『主張』、『指導力』、『協力』、『予測力』、『知的・身体障がい者への対応』、『対応力』の9項目において自分の学びに当てはまるものを問うた。

両年度において、両学年が9項目の中で一番多く「大変いい経験ができた」と回答した項目は、『協力』であった。次に高かったのが『協調性』、3番目は『対応力』であった。

「大変いい経験ができた」の回答が少なかったのは『予測力』と『主張』で、次に『指導力』であった。また、「あまり経験できなかった」と「全く経験できなかった」の回答が多かった項目は、『指導力』『イベントの企画力』であった。

この結果から、一度経験があり、流れが把握できている指導的立場にある2年生と、何をするにも初めてであり、ましてや日本に来て間もない留学生の多い1年生とでは、学びが違うことが推測できる。

項目を個別に見てみると『主張』することについては、「少し経験できた」とする学生は、2017年度12名（33%）に比べ、2018年度は28名（59%）と有意に多かった（ $p<0.05$ ）。2017年度は「大変いい経験ができた」とする1年生が3名（15%）に対し、2年生は10名（58%）と有意に多かった（ $p<0.05$ ）。また、2018年度は1年生2名（7%）、2年生は7名（36%）と2年生が有意に多いとは言えなかった。この『主張』は、1・2年生が日本人同士であった2017年度の2年生は、日本人の後輩や日本人の同期生に対して自分の意見をきちんと主張できる環境であったのに対し、2018年度は、留学生であり年上の後輩や年上の同期生に対して、主張しすぎず、協調しながらイベントを進めていく必要性があったのではないかと考えられる。

『指導力』についても「少し経験できた」とする学生は2018年度の1・2年生23名（48%）で、「大変

いい経験ができた」「あまり経験できなかった」「全く経験できなかった」に比べ、また、2017年度の1・2年生7名（19%）に比べて有意に多かった（ $p<0.01$ ）。2018年度の2年生で「大変いい経験ができた」とする学生は7名（36%）、「すこし経験できた」学生は11名（57%）、「あまり経験できなかった」1名（5%）で、2017年度2年生の「少し経験できた」とする学生は11人（57%）多かった（ $p<0.05$ ）。これは前述の2018年度の1年生が指導力の必要性を学んだ学生が多かったことと絡めて考えると、やはり2018年度2年生が『指導力』を少ししか経験することが出来なかったことで、2018年度1年生は指導力の必要性を学んだことが予測される。

『対応力』については「大変いい経験ができた」学生が2017年度の1年生は、5名（26%）であったのに対し、2018年の2年生の時には12名（63%）と有意に多くなった（ $p<0.05$ ）。2017年度の2年生は9名（52%）であるが有意に多いとは言えず、2018年の2年生は、上級生になったことと、留学生がいることで、より対応力がついたと答えていると思われる。

『協調性』についても2017年度の1年生は、「大変いい経験ができた」とする学生は9名（47%）であったのに対し、同じ学生が2年生の時には15名（78%）と有意に増えた。この項目も2017年度の2年生は8名（47%）で有意差があるとは言えなかったため、2018年度の2年生は、留学生が加わったことで、より協調性を学んだ可能性がある。

『イベントの企画力』に対して「大変いい経験ができた」とする学生は、2017年度1年生は7名（36%）であったのに対し、2018年度の2年生の時には5名（26%）と唯一減っている。2017年度の2年生は8名（47%）であり有意に少ないとは言えないが、本来は1年次よりも有意に多くなってほしい項目である。2017年度2年生より2割少ないのは、開催時期が影響していると思われる。2017年度は11月開催で、企画に十分な時間をとることができたのに対し、2018年度は6月開催であり、準備を間に合わせることに精いっぱいであったことも要因の一つと考えられる。2019年度は1年次の後期から学生が自分たちで企画する時間を十分に作ることを課題と考える。

(4) 質問④その他の気づき

本イベントは、事前準備から当日の進行、後片付けまでのすべての運営を2年生が中心となって行いが、表3のコメントからそのこと自体の大変さを実感していることがわかる。特に、表2の1～10には顕著に表れている。

表3は1年生のコメントだが、2年生の運営の様子から次年度のイベントも自分たちの手で成功させたい

(表2) 2017年度 2年生 その他の気づき

1	トイレ休憩時、トイレ係以外の人でもトイレを待つ人の列が長くなっていることに気づいた人は、3号館のトイレに連れて行ったりしてほしい。
2	1年生に任せるといことがうまくできなかった。どう動かした方が効率的に行動できるかがわからなかった。
3	普段、人を使うことがないので、どうすればいいかわからなかった。結局2年生でほとんどしてしまった。
4	協力していくことが大切だと感じた。一人で動くのではなく、意見を出し合い連携することでいいものが出来上がっていくと思った。
5	CDが再生できなくなり、ラジカセから再生しなくてはいけなくなった。CDデッキをきちんとしたものにした方が良かったと思った。
6	準備にとりかかるのが遅かったと思う。リーダーになって人を動かす力の大変さが実感できた。
7	高校生の対応に困る。次の2年生、頑張れ。
8	先のことを考えて行動したり、2年生として1年生への指示は難しかった。本番は、全体で協力してできたと思う。
9	準備物(来客用スリッパ)の不足、案内や確認FAXの改善、転倒予防・リスクマネジメント(男性用トイレ前の履物の並び揃え)。来年の検討事項、連絡係は不参加の事業所でも、6月なら参加できるとの意思表示があり、事業所数、参加人数とも増えることが予想される。
10	音響の設備を改善してほしい。
11	ちょっとしたミスもあったが楽しかった。女子高生が制服ではなく体操服での参加だったので良かった。
12	中学生の歌や事業所の出し物の時、学生が積極的に前に出て一緒に踊っていたのが良かった。
13	当日、事業所の皆様がとても楽しそうに嬉しかった。みんなの協力があっての遊友広場だと思う。
14	中学生たちはとてもかわいく素晴らしかった。来年からも来てもらえれば良かったと思う。高校生への対応が困った。
15	皆と力を合わせた結果、良い遊友広場になったと思う。

(表3) 2017年度 1年生 その他の気づき

1	見送りは大切
2	事業所のパフォーマンスがわかり次第周知してほしい。リアクションがとりづらい。
3	過去に起こったトラブルは教えてほしい。
4	全員に伝達が上手くいくようにしたい。
5	皆で作った紙の花がそのまま来期も使用できるような保存方法はなかったのかな、もったいないな、と思った。
6	知的障害者の方が興奮されて、上半身をぶんぶん動かいておられるのを見た時は、前の椅子に頭をぶつけるのではないかと少し怖かった。もう少し、椅子の前後の間隔をあけた方が良かったのではないかと考えた。
7	初めてとても緊張した。最初は何をしてよいかわからなかったが、2年生の指示に従って成功することができた。本番はすごく楽しむことができた。来年もみんなが楽しめるように協力して頑張りたい。
8	身体障害者の方や知的障害の方と触れ合うことで良い経験をさせていただいた。
9	来年は自分たちがリーダーになり頑張っていくことになるので、それを意識しながら参加した。
10	レクリエーションやダンスがうまくいったので良かった。
11	レクリエーションやダンスがうまくいったので良かった。
12	全てにおいてとても楽しくできた。
13	とても楽しんでもらえたと思うので良かった。来年はもっとすごいをしたい。
14	参加できなかった。来年は絶対参加できるように健康管理をしていきたい。見送りの時に、担当していた事業所の方(ダウン症)から抱きしめられた。好かれたのだとわかり嬉しくなった。

(表4) 2018年度 2年生 その他の気づき

1	当日の学生の集合時間など、参加者ではなくホスト側のタイムテーブルを作っておくべきだと思った。口で伝えるだけでは伝わらない情報がある。ホスト側の情報がアバウトすぎる。
2	それぞれ係は決まっているが、それぞれがそれぞれのことをするだけではなく、みんなで作り上げてこそその遊友広場なので、ちゃんと終わったら別の係を手伝いなどのことをしたら良いと思う。
3	言葉での説明が難しい場合は、図やイラストを使うなどして説明する。
4	今回レクリエーションのリーダーをし、人をまとめることの大変さを知った。
5	留学生の方に説明するのが大変だった。
6	今回は、企画の難しさ、人を動かすことの大変さ、また、人から裏切られたと思ってもそれを相手はそうと思っていないことなど、数々の壁があった。それを乗り越えたのか本当にわからない。若い学生のメンバーは、少しずつ成長してくれたのだろうか？
7	成功できてよかった。
8	みんなで最高の遊友広場ができたので良かった。
9	去年は体調が悪くて休んだが、今回参加できてよかった。体調管理はしっかりしてほしいと思った。
10	色々あったが、最終的には利用者さんの笑顔を見ることができ、事故もけがもなく終わることができてよかったと思う。

(表5) 2018年度 1年生 その他の気づき

1	仕事に余裕がある人は、他の部署の手伝いをしないと時間もかかるし効率が悪い。
2	暑い体育館だったので、うちわがあれば良いと思った。うちわも西九大のキャラクター入りだったら良いと思う。そのうちわを持って帰っていただければよいと思う。
3	知的障害の方への対応がわかった。
4	連携して協力することが大切だとわかった。
5	臨機応変は大事。
6	来年は私たちがしなければならぬのでとても難しいと思った。
7	先輩がたくさんのことをやってくださったので、次は自分たちがやらないといけないので、まとめることが大変だなと思った。
8	利用者様と一緒にレクリエーションをすることが楽しかったので、来年のためにも楽しいレクリエーションをこれから考えている。

という思いが読み取ることができる。また、表3の2. 3. 4. 7のコメントからは2年生からの十分な指示・伝達の重要性も実感したことがわかる。

表4は、2018年度の2年生、つまり2017年度入学生のコメントである。2年生になり実際自分たちがリーダーとして1年生に伝達・指示をして準備を進めたわけだが、表4からは、その難しさを実感したことがわかる。特に、この年からは留学生が多数在籍していたことで、学生への確実な情報伝達が課題でもあったようである。また、表5の6のコメントからは、イベントの準備・運営の中での学生同士の人間関係のトラブルがあったこともうかがえる。

表5は、現在の1年生のコメントである。初めてこのイベントに参加し、2年生のリーダーシップのもと準備を進めたわけだが、リーダーシップをとることの大変さを感じ、自分たちが次年度にうまく運営できるのか不安な気持ちを持っていることもうかがえる。

遊友広場は学外参加者を含めた大きなイベントである。このイベントを学生が主体となって運営し成功させるためには何が重要なのか、どうすればより良いイベントとなるのか、リーダーシップを取る2年生の言動を通して1年生が感じ取っていることが表3～6から理解できる。自分たちの次年度の姿を先輩のリーダーとしての言動に重ねることによって、より積極的にイベントの運営に参加・協力ができていると考えられる。まさにアクティブラーニングの実践であり、学生にとっても非常に貴重な学習となっている。

IV. まとめ

今回の結果から、イベントによる体験学習には、肯定的な学びが多いことがわかった。

介護者には様々な技術を身につけることが求められるが、このイベントの準備や運営に役割をもって関わったことにより連携・責任感・協調性を学び、イベント当日の利用者との触れ合いから他者理解・対応力・楽しみ・充実感など実体験から多くのことを学ぶことができている。

このような体験型の学習は、講義形式の一方的学習と異なり、学生がそれぞれの体験から学びを得ており、学生個人が持つ力を高めている。イベントに参加した学生が自身の変化・成長を実感しており、今後の自信につながることを期待できる。これらは、介護福祉士を目指す学生にとって大切な学びであり、対人援助能力を伸ばす貴重な機会となることから、教育の意義は大きいと考える。

特に教員側が目的としていた報告・連絡・相談の大切さ、イベントをする際の事前準備の大切さ、他職種との連携、自分たちも一緒に楽しむことが参加者の方々にも伝わる事、イベントや仕事を行うには周りとの協力体制が不可欠であり、協調性をもってチームで協力し合うことの必要性は十分学べていると思われた。さらに多くの学生が「大変いい経験ができた」と言えるように事前・事後指導の工夫をしていかなければならないと考える。

また、イベントにおける不測の事態を予測した対策ができていないため、各部署において、また、全体で考えさせ、介護の職場においても活用できるように身につけさせていく必要があると思われる。主張においては必要な事ではあるが、他と協調するためには主張しすぎないことも大切である。介護福祉士に求められる“協働によるチームケア”のためにも主張よりも協調の学びが多いことを期待する。2年生においては人を動かすことや指導力、イベントの企画力においてもっと多くの学生が「大変いい経験ができた」と答えられるように、早めに企画をする時間を作り、自分たちで綿密な計画を立てられる

ようにすることが必要と考える。新2年生には、4月の時点から新1年生と積極的に関りをもたせるとともに、2年生が自分たちで1年生を効率よく動かすことができるよう、トラブルが発生しないよう、教員はサポート体制を整えていく必要があると考える。

V 終わりに

今回、遊友広場における教育効果については、留学生を迎えたことと開催時期を変更したことでの影響を調べ、今後の方向性について考えてみた。この結果を2018年後期の1年生の指導から生かし、2019年度からの「遊友広場」も学生にとって有意義なものにしていきたい。

今後もこれらの体験学習を基に学生が介護福祉士として実践力を身につけるために、これらのイベントを教育に取り入れ教育効果の発展を目指していきたい。

これからの介護においては、住み慣れた地域社会で生活を続けることができるように継続的な支援体制と地域社会の創造が必要とされている。これは、イベント開催当初から、目的の一つとして挙げられていた地域貢献とつながる。介護福祉士として、共に生きるまちづくりを積極的に推し進めるためには、限られた介護養成の期間で、地域に視線を向けた教育活動を体験することが重要である。これからの養成教育の質の向上のためにも地域への視点を養うような教育上の取り組みと研究が必要であると考える。

参考文献

- 1) 高尾兼利：「大きくなーれ友だちの輪」の変遷とその意義について 西九州大学・佐賀短期大学紀要第36号（平成17年度）
- 2) 鍋島恵美子，立川かおり，馬場由美子，吉村浩美，福元健志，小川智子：体験学習を通じた教育方法に関する一考察～イベント「大きくなーれ友だちの輪」の教育効果～ 西九州大学短期大学部紀要第43巻（平成24年度）